

山菜の栽培

1. 山菜の栽培の現状

自然食品ブームで、山菜類の需要が増加しています。しかし、近年は自生地への入山者が多くなり、乱獲が心配されています。

また、自生地附近でも森林の手入れ不足などから、樹木がうっ閉して植生が変化するなど、生育地が狭められています。

こうしたことから、従来の山取りから栽培による安定供給が望まれるようになり、各地で山菜の栽培が行なわれるようになりました。

栽培の方法は一般的な露地栽培の他に、品目によっては促成栽培、周年栽培も行なわれています。しかし山菜は自然環境に恵まれたところで、自然に近い状態で栽培することが基本になります。

野菜のように集約栽培や消毒などの管理をすると、山菜固有の風味がなくなることがあります。こうしたことから、できるだけ粗放な栽培が望まれますが、幸い山間地域は自生地に近い環境条件が得られることから、遊林農地などを利用して、有用な山菜を増やしたいものです。

(1) 栽培品目

栽培にあたっては、地域性がありしかも季節性の強い品目を中心に栽培計画を樹てます。これは季節感が失われて商品価値が乏しくなると、山菜としての意味がなくなるからで、地域に適した品目の導入が重要になります。

(2) 栽培の適地

山菜の多くは沢筋や山麓のやや湿度の高い土地を好み半日陰地で昼夜の温度差の大きいところが良質なものが生産されています。

また、土中の水分が適度であれば畑地のような、日の当たる所でも栽培は可能です。とくに耕土が深く肥沃地で通気性のある柔らかい土壌で排水がよいところは最適です。

(3) 栽培に当たっての留意点

山菜は急に規模拡大をしようとしても、むずかしい作目ですから、だんだんに増やしていき最終的には村起こしにつながる目標面積にします。

このため大量に苗を養成することがポイントに

なります。一般的には実生で行ないませんが、この場合適期に種子の採取を行ない、まき付けの出来る体制にしておきます。もし種子の採取ができない場合は、産地から購入します。

実生法は育苗に手間がかかるので、品目によっては自生地から根株の移植や、分根方法などで短期間に収穫ができるようにする方法もあります。

2 品目別栽培のポイント

(1) ワラビ

近年、一部の自生地を除いては、よほどタイミングよくなければ採取することが困難な品目です。しかし遊休農地があれば、根株を移植することで比較的確実に栽培することができます。

1) 栽培の方法

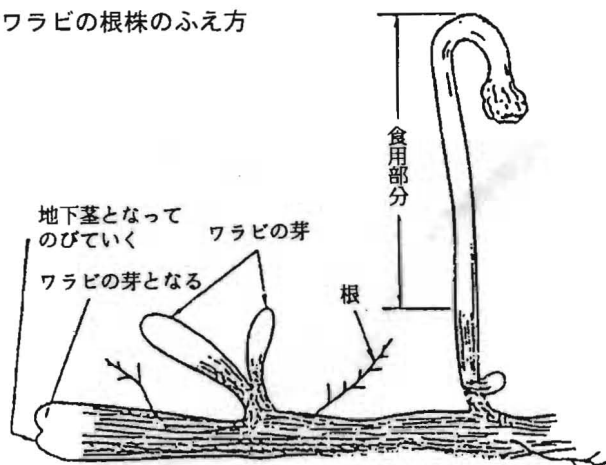
ワラビの栽培は「根株」が重要になります。沃えた根株が沢山あれば収量が多くなるので、栽培する場合は自生地から活力のある若い根株を移植します。

ア. 根株の掘り取り…10月下旬～11月下旬か、翌年の4月中旬頃までの芽の動かない時期に芽のついた根茎を30cmくらいの長さで掘りとりまます。掘り取ったら乾かないように土囲いなどで定植まで保管します。

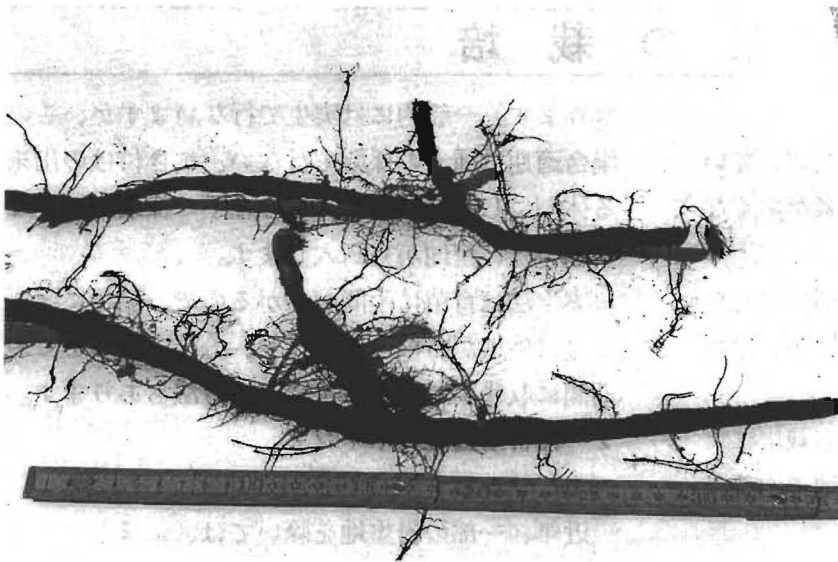
イ. 定植準備…できるだけ深耕し堆肥などの有機質肥料を10a当り2t程度全面散布して整地します。

ウ. 定植…芽の活動する前に、深さ10cmぐらい

ワラビの根株のふえ方



「ワラビ」より (水上久男著)



移植に用いたワラビの根株（平成3年4月定植）

平成3年4月に定植したワラビの
平成5年春の収量（面積20㎡）

| | 本数 | 重量(g) |
|-------|-----|-------|
| 5月5日 | 22 | 140 |
| 5月11日 | 125 | 1030 |
| 5月14日 | 120 | 360 |
| 5月21日 | 30 | 100 |
| 5月25日 | 50 | 350 |
| 5月29日 | 20 | 180 |
| 6月6日 | 120 | 820 |
| 計 | 487 | 2980 |

(注) 5月中旬の晩霜で全滅したが、その後回復して上記の収量が得られた。

の溝に根株を2本ずつを、株間30cmくらいで植えます。

エ. 定植後の管理…乾燥防止のため、敷ワラを5cmくらいの厚さに敷き、生育状況を見ながら化成肥料を追肥し根株を丈夫に育てます。必要に応じて除草管理を行いません。

カ. 収穫…3年目から本格的な収穫に入ります。よく繁茂するときに5～6回収穫でき、10a当たり500kg程度の収量が見込まれます。

(2) ギョウジャニンニク

ユリ科の多年生草本で、全草からニラやニンニクより強い臭気が出ていて、ビタミンCやゲルマニウムなど薬用成分が含まれていて、精力回復などに効果があると云われていて、人気のある山菜です。

山菜として利用する部分は若葉と鱗茎ですが、資源保護のため、地上部の若葉を利用するのが一般的です。

1) 栽培の方法

地上部は早春から発生し始め、初夏に花茎が伸びその先端に白色に花がつき、7月に入ると種子が熟して落下します。この種子をとりまきにして苗を育成する方法が一般的に行なわれています。

ア. 播種…畑地でも発砲スチロールの箱でもできますが、種子が乾燥す

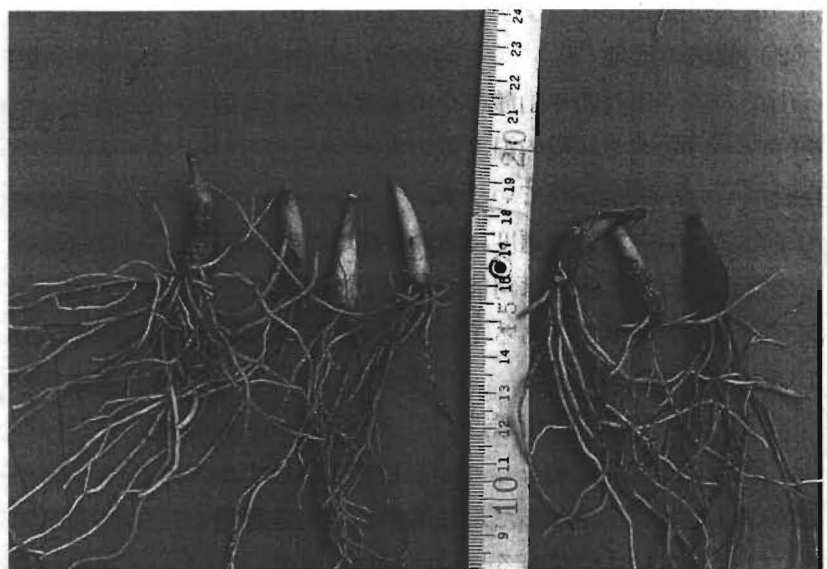
ると2年目発芽になることがあります。

発芽したら日陰や散水管理を行ない乾燥防止につとめます。

イ. 定植…苗が充実したら2～3球を1株として、十分茎肥を施した本畑に畝幅60cm、株間20cm間隔で根付け生育管理を行いません。

ウ. 収穫…実生の場合、収穫できるまでには3～4年かかります。春早く萌芽して5月中～下旬頃若芽が伸びて葉が開いたころ、根元の部分を3cmくらい残して採取します。遅くなると茎が硬くなり、品質が悪くなります。

なお、収量は1a当り100～120kgが目安です。



発芽後3年経過したギョウジャニンニクの根株

(3) フキ

フキは山野や平地の道端に自生していて、早春は花茎をフキノトウと呼び、春の香と味を楽しみ、初夏には茎を食用にするなじみの小菜です。

1) 栽培の方法

適地は湿気の多い所に集団で生育していて、適温は15～20℃とされているように、夏期に比較的涼しい乾燥しない場所を選定します。

ア. 増殖…フキは3倍体のものが多く種子ができないので、このため根株を細かく切ってさし根で行ないます。

さし根の時期は4月ころに、堆肥などを十分施用して畝幅50～60cm、株間30～40cmぐらいで行ないます。

イ. 管理…発芽後は雑草の除去と根株育成を重点にした管理を行ないます。

ウ. 収穫…1～2年は根株育成するためあまり収量は上げないが、3年目ぐらいから本格的に行ないます。経営を目的とする場合10a当りおよそ3tの収量を目標にした栽培計画が必要です。

(4) オオバギボシ

自生しているものは、空中温度の高い多湿で、春先には日が当たり、夏には半日陰になるところに多く繁殖しています。

こうしたことから、肥沃な沢沿の間伐や枝打ちの行き届いたスギ林内などが適地になります。

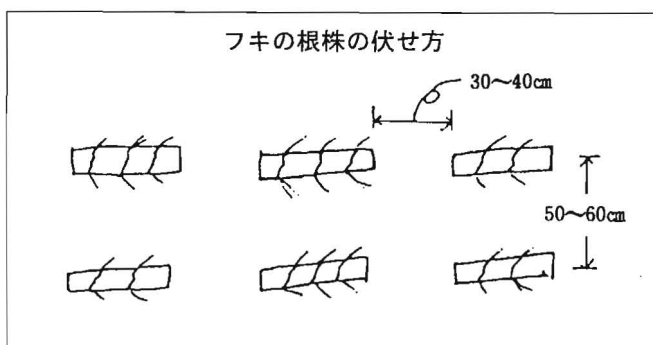
1) 栽培方法

実生と株分け法がありますが一般的には株分けで、早春か、晩秋のうちにナイフで5～6芽ずつ切り分けて植えます。根株の発育の状態が品質に影響するので、肥培管理が大切です。

2) 収穫

葉柄が若く軟らかいうちに収穫しますが、採取する場合葉柄を全部刈り取らず、一株に1～2枚は葉を残すようにします。全部刈り取ると翌年枯れることがあります。

(特産部 一ノ瀬)



フキの栽培